

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	嶋崎 太一
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) カントにおける自然の形而上学の体系			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授 松井 富美男		
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授 衛藤 吉則		
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授 後藤 弘志		
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	大学院教育学研究科・教授 畠中 和生		
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、『純粹理性批判』(以下『第一批判』)から『自然科学の形而上学的原理』(以下『原理』)を経て『オプス・ポストゥムム』に至るカントの「自然の形而上学」の形成過程を内在的発展として捉え直すことで、前批判期には不明確であったカント自然科学論の体系的な位置づけを明らかにしたものである。全体は序説と本論三部、十二の章と終章からなり、第III部が中心で第I部と第II部はその導入部をなす。</p> <p>第I部は、「自然の形而上学」の考察に先立ち、『第一批判』の第二版で主題化されたカントの自己触発論を自然科学的文脈において読み解き、『原理』における運動学にも同様の着想が見られると論じる。第1章は、外的触発が主観に認識の「実質」を与えるのに対して、自己触発は主観に時間的形式のみを与えるとする批判主義に徹した解釈を行う。第2章は、自己触発論と観念論論駁の関係に言及しながら、自己触発が外的世界の实在を常に前提にすると説く。第3章は、『原理』での運動学の思想に依拠して、自己触発を「主観の行為としての運動」とみる斬新な解釈を提出する。</p> <p>第II部は、「自然の形而上学」の構想と概念について述べる。第4章は、前批判期の「自然の形而上学」の構想が『原理』で結実した経緯を説明すると共に、『原理』における「現象学」の意義を指摘する。第5章は、「運動、不可入性、慣性」などの経験的概念を手掛かりにして『原理』をバウムガルテンとニュートンの狭間に位置づけ、後者へのアンビバレントな見方が根強いことを指摘する。第6章は、カントが『原理』で『プリンキピア』を「自然科学の数学的原理」と表記したことに着目して、彼がニュートンを哲学者に見立てて「自然科学の形而上学的原理」をニュートン的な流れの中で位置づけたと主張する。</p> <p>第III部は、本論文の中核をなし、『原理』及びその周辺部について論じる。第7章は、カントの自然科学論が動力学と力学の区別の下で初めて成立し、この区別がヴォルフの根源的力と派生的力の区別に相当すると指摘する。第8章は、『第一批判』の知覚概念に焦点を当て、それが動力学的性格を持ち『オプス・ポストゥムム』X, XI 東の知覚概念に繋がっているとの見解を示す。第9章は、カントが動力学的に説明された化学的作用を一つの理念にまで高め、実践哲学でも重要な役割を果たしていると指摘する。第10章は、『第一批判』における「substantia phaenomenon」という概念がバウムガルテンの「phaenomena substantiata」という概念に影響されつつも、モナド論から脱却することで初めて『原理』の第一力学法則(物質量保存則)が成立したことを明らかにする。第11章は、第二力学法則、すなわち慣性法則を扱う。カントはニュートンに近い立場であったが、$F=mv$ という非ニュートン的な「促動 Sollizitation」の概念をも内包していたことを指摘する。第12章は、『オプス・ポストゥムム』では</p>			

『原理』の「動力的方法」とは異なる、ア・プリオリに物理学への道を開く「超越論的動力学」が展開されていることを指摘して、「自然の形而上学」が内的に発展していたことを明らかにする。

終章はこれまでの議論をまとめながら、「自然の形而上学」がカントの生涯を通じて変動し続け、試行錯誤の産物でもあったと結論づける。

このように本論文は、これまでカント研究で取り残されてきた「自然の形而上学」に焦点を当てて、批判哲学と突き合わせながら科学史的、哲学的にカント自然科学論の立場を解明した先駆的労作である。『第一批判』や『オプス・ポストゥムム』などの自己触発論に関しては更なる深化が望まれるが、カントの「自然の形而上学」をその哲学体系の内に位置づけて、その意義を明らかにした点は高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)